

「メキシコの教育」研究と書誌情報の30年（特集 途上国研究のための研究ツール -- 新・旧書誌情報 を活用する）

著者	米村 明夫
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	150
ページ	34-35
発行年	2008-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00046979

「メキシコの教育」研究と書誌情報の三〇年

米村明夫

●一九七〇年代末、入所の頃

特集／途上国研究のための研究ツール—新・旧書誌情報を活用する

私は、メキシコの教育を、社会の発展や開発との関連という観点から研究している。三〇年ほど前に入所した当時は、書誌情報を得るのに苦労した。「教育と開発」というテーマは、どこの図書館の分類項目にもなく、研究数も少なかった。ラテンアメリカあるいはメキシコ等の地域的限定を行なうと、研究数はさらに減った。先輩が「科学的な研究」に必須のものとして、ラテンアメリカ研究のための書誌案内書 *Handbook of Latin American Studies* を紹介してくれた。当時は、読んだ論文の引用文献をさらに読むというようなことが多く、自分が選んだ立場の論文ばかりを読みがちになるので、それを避けることができるという。ただ *Handbook* は、単行書のみが挙げられているので、例えば、一九七八年版で見ると EDUCATION-MEXICO の項目は一二点しかない。また EDUCATION AND DEVELOPMENT という項目はない。教育の研究情報検索では、アメリカの教育省の Education Researches Information Center (E

RIC) による、当時では最先端のコンピュータ技術を用いたサービスがあったが、利用にはそれなりの手続、手間が必要であった。現在、インターネットによるサービスがあるので、New Mexico にヒットしないようにして、Mexico & Development として探すと、一九六一年から七七年の間の出版物としては、一七九点の雑誌記事等がヒットする(七七年だけでは二八件)ということがわかる。ただERICは、英語文献に限定されている。アジア経済研究所資料部(図書館)が作成してきた『アジア経済資料月報』は、スペイン語文献を含め、開発という視点が自ずと入ってくるなど、以上の問題点を少し改善していた。ただ、教育というテーマでは相変わらず、点数が限られ、地域を限定するとまた減った。私は、発展途上国全体、テーマも教育から労働、社会といったものに拡げて見るようにしていたが、時間のかかる割には、得るものは少なかった。

●一九八〇年代初めのメキシコで

ところが、一九八一年から八三年までメ

キシコに滞在して、メキシコの教育学界がよく組織されており、書誌情報も Congreso Nacional de Investigación Educativa, *Documentos Base, Volúmenes I y II, 1981* (教育研究全国集会『資料ベース』)として文書化されていることがわかった。私の関心と関連する部分を見ると、「教育と社会に関する理論・方法」、「教育と経済構造」、「教育過程と階級構造」、「教育過程と権威構造、権力制度」について、計一三〇ページに渡って、研究・文献レビューが研究者によってなされている。そこには、私が日本で学生時代に勉強したようなアメリカやヨーロッパの研究、また、当時ラテンアメリカの社会科学の世界を席卷していた従属理論、ネオ・マルクシズムの影響が見て取れる。また、メキシコを含めたラテンアメリカの主要な教育研究所によって、地域の教育研究情報のネットワークをつくらうとする動きがラテンアメリカ教育情報・文書ネットワーク (Red Latinoamericana de Información y Documentación en Educación = REDDUC) という形で具体化し、チリの教育研究所 (Centro de Investigación y Desarrollo de la Edu-

(scan) が定期的に情報誌を出版していた。研究水準が高い発展途上国では、現地での書誌的情報作成活動も活発であり、それにアクセスすることの必要性を痛感した。

●一九九〇年代末以降

一九九〇年代半ば以前までは、図書館のカードカタログや上述の冊子体のお世話になってきたが、現地に行くことはそうした点でも必要なことであった。しかし、一九九〇年代の末以降、書誌情報事情は根本的に変化した。IT、インターネット利用が進んで、アクセス可能なデータベースの範囲が飛躍的に広がると同時に、情報へのアクセスは極めて容易となった。現地発信の書誌情報という点では、先の REDDUC に加え Red Mexicana de Información y Documentación en Educación (REDMEX) が、メキシコの教育研究の書誌的情報をインターネットによって提供している。アジア経済研究所図書館の場合も、そこが作成している蔵書を中心としたデータベース以外に、協力関係や契約によるデータベース (NII や JSTOR 等) も利用可能である。さらに、google 等の検索エンジンや各国語版 Wikipedia も書誌的情報を含んだデータベースあるいは百科事典的な研究ツールとみなすことができる。その際、自由なキーワードによる検索が可能になったことは、私のように分類がしにくいテーマに関わる書誌的情報を得ることを極めて容易にしてく

れることになった。この間、ラテンアメリカの教育研究も大きく発展してきており、また私の関心分野は広がると同時に、知りたいことが特定化していることも少なくないので、こうした技術的な進歩の恩恵にあやかることなく仕事をすることは不可能となった。

●変化の図書館にとっての意味

このような変化は、アジア経済研究所図書館にとってどのような意味を持つであろうか。従来、図書館の活動は蔵書を中心として展開されてきた。①蔵書とすべきものの決定(収集)、②蔵書の整理と管理(カタログ作成と物理的配置)、③蔵書の利用サービス(書誌的情報の提供・本の貸し出し等、蔵書と利用者の結びつけ)がそれである。現在起きている変化(あるいは利用者にとって望ましい変化)は、①契約によるデジタルメディアを含めた「蔵書」とみなし得るものの拡大と、②従来の活動全体を統括してきた専門的知的技術としての分類学・分類方法の利用者志向化、③「蔵書」以外についても、利用者にとって欲しい「本」の特定、入手につながるサービスや情報の提供、ということが出来る。こうした変化はITの使用を前提にするものであり、それは、目に見えるトリトリとして蔵書空間、手にとって見られる活動の成果・結晶としての書誌情報冊子という、図書館活動にとってわかりやすいアイデンティティ

●変化の研究者にとっての意味

の拠り所を揺がすものとなっている。しかし、そうした変化は外見上のものであって、本質的には、収集、整理、収集物の利用者への提供という従来の機能は変わっていない。ただ、そうした機能は個々の図書館によって自足的に閉じられた形ではなく、いわば世界中の図書館や研究機関の共同によって担うことが志向されてきているといえる。

研究の書誌的情報データベースの拡大と書誌的情報や研究自体へのアクセスの飛躍的容易化は、基本的に、技術的な進歩と研究自体の持つ普遍性への内在的要求を背景としながら、研究のあり方の変化と相互に因となり果となり進んできたものである。それは、発展途上国研究、地域研究にとって、研究条件の大幅な改善を意味している。しかしそれは、手放しで喜んでいれはよいというよりも、むしろ、我々の研究のオリジナリティ、日本人として研究することの意義、さらには大量の情報の中で本来知りたかった途上国の現実に接近しているか、といった点についての反省を迫るものであり、それを伴ってこそ初めて有効なものとして活かすことができる条件のように思える。

(よねむら あきお／アジア経済研究所
地域研究センター)